Jumla市長とJumla　Feeder　Hostel訪問報告　2017年9月18日　山下威士

　2017年6月1日のHari Lamasal教育省次官との協議の中で、これからの教育の実質的権限は、とくに、私どもの関心の有る女性教師の養成という任務も、地方政府に、その重心が移されると告げられ、その際に、会うに値する方として、Jumla市長を紹介されました。その示唆にもとづいて、今回、山下理事長、山下事務局職員、Manjuさん、Krishnaさんとが、9月４日（月）16時10分～17時10分、および、9月5日（火）17時～17時30分に、Jumla市役所に、市長を訪問しました。

１　「Jumal市長Kantika Sejuwal」さん(46歳)のプロフイール

さくら寮第４期生Phulmayaの大叔母（＝祖父の弟の妻、だから、Phulmayaは、甥の娘）さんです。市長ご自身が、Jumla　Feeder Hostel（FH）の出身（おそらくは、1990年前後）で、卒業後、教師となり、小、中、高校と進み、Karnali　Higher Secondary Schoolの校長となられ、同校をモデル校にされました。その素晴らしい成果は、雑誌にも紹介され、私どものマネージャーのKrishanaさんが、この高校に見学に来たことも有るといいます。夫（政治家）が、飛行機事故で亡くなった後を受けて、政治家に転身されました。この事故での死亡を悼み、Krishanaさんが、詩を作り、新聞に掲載されたこともあるそうです。この夫の、立派な銅像が、病院の前に立っていました。Kantikaさんは、2017年5月の地方選挙で、Jumla市長に当選したばかりです。

２　当日の会談内容；女性教師養成のモデル・ケースになってほしい。

山下理事長より、18年前に、Jumla　FHを訪問したこと、それ以降、ネパールにおける女性教師の養成の必要性を強調し、ポカラに全寮制のさくら寮を建設し、KCPとの協力の下に、100人の女性教師（市長の甥の娘に当たるPhulmayaさんも、その第４期生）を養成してきたという、さくら寮の10年間の経験を、「10周年記念誌」（ネパール語版）をもとに紹介しました。

山下理事長は、FHを利用してのネパールにおける女性教師養成の重要性を強調し、Jumla FHの，設立当時の理念；女性教師の養成への立ち返りを求め、Kantika市長が、率先して、ネパールにおける女性教師養成のモデル・ケースを主導して形成して欲しいとお願いいたしました。まさに、「Kandika市長こそが、この役割に相応しい」と。

これに対して、Kandika市長は、自分もFHの出身であり、その生涯の大半を教育者として過ごしてきたから、女性教師養成の重要性は、十分に理解しているつもりだから、期待に応えるように努力はしたいと思う。ただ、しかし、資金の問題など、課題も山積していると答えられました。

３　10月のさくら寮でのフオローアップ・セミナーに、市長を招待。

私たちは、Jumla　FHを、視察し、在寮生と話をした後、翌日の9月5日17時に、市長室を再度訪問して、さくら寮による女性教師の養成の成果を、直接に市長に見ていただきたく思い、10月8日～11日までのフオローアップ・セミナー期間中に、ぜひ、ポカラのさくら寮にお出でいただきたいと招待状をお手渡ししました。

その際にも、昨日、Jumla　FHを訪問し、16名の在寮生と面談した結果、15名までが、教師になりたいと希望していることから、せめて、12年生3名の、教師任用の道を開いて欲しいと要望しました。また、一見して、次に述べるようにJumla　FHが、あまりに劣悪な住環境であるため、市長が、教師への道を開くとのご決断を示してくだされば、私どもも、日本の建築の専門家に頼んで、この住環境の改善に、できる限り協力してもよいとも申し入れました。

４　Jumla　FHの学生との懇談と、FHの実情

　私たちは、市長との面談の後に、9月4日17時30分～19時に、Jumla　FHを訪問しました。このFHは、Jumla　Campusの敷地内にありはしますが、所属は、Karnali Secondary Schoolです。建物は、Campusと同時に、NORADやUNESCO,UNICEF、ネパール政府の援助で、1970年代に建築されたものです。

　山下理事長が、在寮生20名中、16名と面談し、雑巾と、JNFEA賛助会員の福井直矩さん寄贈の衣類（ピアニストのお妹さんのもの）を、全員に配布しました。この16人中　14人が「教師になりたい」、1人が「校長になりたい」、1人が「農業をやりたい」といっていました。

　在寮生の構成

　　　　　　Mugu郡出身　Kalikot郡出身　Jumla郡出身　合計

8年生　　　　１人　　　　　　１人　　　　　２人　　　　４人

９年生　　　　３　　　　　　　　　　　　　　１　　　　　４

10年生　　　　１　　　　　　　　　　　　　　１　　　　　２　　　10人

11年生　　　　　　　　　　　　　　　　　　　３　　　　　３

12年生　　　　　　　　　　　　２　　　　　　１　　　　　３　　　　６人

　合計　　　　　５人　　　　　　３人　　　　８人　　　　16人

つまり、このFHは、リモート・エリアの学生が、高校に通うために作られた寄宿舎という旧制度と、2011年以降に改められた、FHは、「10＋２」の付属の寄宿舎とするという新制度とが混在していました。

　FHの建物は、2階建てで、2階が、学生の居室になっています。

＊　1室4名、部屋の両側に２段ベッドが、2組ありますが、上のベッドに登るための階段が、ありません。

＊　窓ガラスなし。部屋には、ソーラーによる裸電球が、ひとつありました。もちろん、板窓を閉めれば、室内は、真っ暗になります。

＊　Mid－Westernの寒冷地・Jumlaにあるもかかわらず、部屋には、暖房施設が、まったくありません。寒くなると、ベッドで、ありったけの着物を着て寝るそうです。もっと寒くなると、学校が、休みなるそうです。

＊　キッチンに、食材が、本日の分をも含めて、まったくありませんでした（これは、謎）。

＊　掃除は、全員でやり、料理は、料理人が作り、寮生も手伝う。

＊　居室にも、ホールにも、机というものが、まったくありません。勉強は、ベッドの上に腹ばいになってやるか、土間に座ってやるそうです。（＊もっとも、これは、ここだけのことではなく、ネパール人の一般的な慣習だそうです。すなわち、ネパール人は、机に向かって、本を読むとか、勉強するとかいう慣習が、ありません。そもそも「机に向かう」という観念がないようです。おそらく、これが、「日常的な・継続的な勉学」と言うことにつながらない遠因ではないでしょうか）。

５　さくら寮卒業生との再会と情報

Jumla　FHからさくら寮に来て学んだ卒業生たちが、山下理事長に会いに、9月4日、5日、6日、Hotelに来てくれた。

Ambika Thapa（Malla）（第３期生）さんは、2年前に大地震の時のカトマンドウの病院の庭のテントの中で生まれた，可愛いSamyan坊やを連れてきてくれました。現在、Private Schoolの教師として勤務を続けています。月給15,000Rs。学校では、「社会」と「英語」を、週30駒担当しているそうです。夫も、教師。

Phulmaya Sejuwal（第４期生）さんは、4年前に結婚。夫は、エンジニヤで、隣の郡のMugu郡に勤務。現在、彼女は、Private Schoolの会計係として働き、月給15,000Rs。Jumlaでは、叔母と一緒似すんでいる。夫とは、とこどき会えるこのことでした。

Jumla　FH出身の、他のふたりの情報。第３期生のKakika Khatriさんは、Surkhetで先生をしており、第4期生のSatya Kumari　Budhaさんは、放送関係の仕事をしている夫と子どもとともに、カトマンドウ在住とのことでした。